

マナウス日本人学校における社会科授業の実践

前マナウス日本人学校 教諭

山形県米沢市立興譲小学校 教諭 笹原 寛

キーワード：小学校社会科、現地校交流、日系人、マナウス

1. はじめに

2015年4月、私はまだ残雪のある山形を後にし、丸一日をかけ、ブラジル連邦共和国マナウスの地に降り立った。真夜中の空港の外に出ると、出迎えたのは湿った暑い空気だった。私にとって、冬がないマナウスでの生活や日本人学校で過ごした日々は、一生忘れることのできない大変貴重な経験となった。そこで、3年間のマナウス日本人学校で実践してきたことを紹介したい。

2. 実践の背景

(1) マナウスの基本情報

ブラジルは、2014年のサッカーワールドカップ開催、2016年にはリオデジャネイロオリンピックが開催され、経済発展も著しい。マナウスは、アマゾン河の中流域に位置し、1960年代にフリーゾーンとして、開港した。急速に人口が増加し、いまや200万人都市である。30社以上を越える日本企業や海外の企業がマナウス市民の雇用を支えている。その背景にあるのは、およそ100年以上も前に移住した日系人の存在である。マナウス市は、ブラジルの中でも特に日系人同士の結びつきが強い都市でもある。西部アマゾン日伯協会を中心に、日本文化が色濃く残るイベントが毎月のように行われている。

(2) マナウス日本人学校について

マナウス日本人学校は、全日コース（全日制）と文化コース（半日）の2コースに分かれ、全校で50人ほどの小規模校である。文化コースは、この学校の大きな特色の一つと言える。このコースで学ぶ児童生徒は、全てブラジル人（多くは日系人）である。午前3時間のみ日本人学校で日本語や体育、音楽などを学習して、午後から現地校に通っている。全日コースの児童生徒にとってみれば、日本人学校にいながら現地の子供たちと生活できる環境にある。このスタイルをとる日本人学校は世界的にみても少なく、貴重な存在である。ブラジルには現在3つの日本人学校があるが、このスタイルはマナウスだけである。このコースができた背景にあるのも、やはり日系人の存在が大きい。このことからマナウスにおける日系人の結びつきの強さを感じることができる。

3. 指導の実践

(1) 指導観

私がここマナウスに来た時の第一印象は、前述しているように日系人の多さと結びつきの強さである。私はこのマナウスという日本の裏側にある場所で、この日系人やブラジル人とのつながりや地域を生かした授業づくりができないものかということ強く感じた。幸いにも学校の地域には、文化コースがあり、日系人自治区があり、ジョゼフィーナジメロ校という日系人が運営する小中一貫校もあった。また、それらは日本人学校ともつながりを欲していたこともあり、お互いの考えが一致し、非常によい環境が整っていた。そこで、社会科を中心としたオリジナルの授業づくりに取り組んできた。

(2) 授業の実践

① 小学3年生における授業の実践～ブラジルで日本と同じような授業をするには？～（2015年）

小学校の社会科には、「学校の周辺について知る」という単元がある。ただマナウス日本人学校の周りを探

索するには、犯罪が多い地域でもあり、ガードマンの確保が必須で容易に周辺を歩くことが難しいという問題があった。また、教科書に載っているような日本の様子とは異なり、どのようにすれば日本と同じような指導を計画することができるのかを考えた。そこで、カシヨエイラ・グランジ自治区（学校が所属する地域）の会長である中谷さんに相談したところ、中谷さんご自身が経営する日本野菜農園や日系人が経営しているゴルフ場だと学校からも近いし、日本の雰囲気味わえるかもしれないとの話をいただいた。バスとガードマンを確保し、計画を作成した。私も含め、3年生3人は、日本から転校してきたばかりで、日本人学校の周辺を知らない児童だけであった。そのため、児童の授業への関心と意欲は高く、バスに乗りながら地図を書き写したり、写真を撮ったりした。中谷さんの農園では、ブラジルのスーパーでは珍しいネギや小松菜などたくさんの日本の野菜を育てておられ、その様子を記録したり、日系人についてのお話をお聞きしたりした。ゴルフ場（マナウスカントリークラブ）では、日系人が土地を切り開いた時の苦労話やコースの様子を見させていただいた。学校の周辺には、日系人が苦労して開拓していった歴史があり、今の地域ができていることを肌で実感できた授業となった。

②小学6年生における授業の実践～現地校との交流からブラジルを知る～（2017年）

学校から近い場所にジョゼフィーナジメロ校（以後：ジョゼ校）がある。そこは、日系人が経営する私立の小中一貫校である。日系人はもちろんブラジル人も在籍している。以前からも現地校交流として、年に3回の交流を行っているが、さらに授業単位でも交流ができないものかと考えた。そこで、6年生の社会で、「日本とつながりの深い国々」という単元がある。児童はブラジルの「食べ物」「生活」「行事」「貿易」を取り上げ、それを日本との関係をつなげて、プレゼンソフトにまとめ、ジョゼ校の児童に紹介した。ジョゼ校の児童にとって大変興味深く感じたよ



＜ブラジルカルタを作成し、一緒に楽しむ様子＞

うで、TV画面を食い入るように見て、その後大いに質問や感想を述べあう場面で盛り上がりを見せた。また、ブラジルのことを取り上げたオリジナルのかるたを作成し、交流も行った。非常に盛り上がりを見せ、異言語と異文化が融合した瞬間となるのを実感した。ブラジルの子ども達の多くは、非常に日本文化に対する興味を持っていることも感じた。

③小学6年生における授業の実践～JICA（Japan International Cooperation Agency：国際協力機構）隊員をゲストティーチャーに～（2017年）

6年生の社会で国際協力について考える授業を行った。児童にとって国際協力という言葉は、なかなか聞きなれない言葉で、授業の導入場面では、具体的にどんなことが国際理解なのかを答えられない様子が見られた。国際協力について調べ学習を行った後に、JICA隊員をゲストティーチャーに迎える授業を計画した。マナウスには2人のJICA隊員が在籍していた。前述したジョゼ校にいる小学校教師、そして、野球指導員の2人である。普通JICA隊員は、日本で活動するわけではなく、発展途上国での任務になるので、日本で現役のJICA隊員から生の声を聴くことはできない。そこで2人を招いてお話が聞けるいい機会であるとも思った。2人には、事前に打ち合わせを行い、JICA隊員を志望した理由や現在の任務の内容について話をさせていただくようお願いをした。授業を終え、児童にとって、身近にJICA隊員がいて、話を聞いたことで、国際協力の本質を捉えるいい機会となった。話を聞く前の調べ学習にさらに自分の国際協力ということへの意義づけをする児童もいた。グローバル教育の一環としても大変有意義な授業ができた。

4. 終わりに

この3年間、日本人学校で授業を仕組むときに悩んだことは、教科書をいかに工夫して指導するかという点である。日本では当たり前に行えること、容易に行えない海外の環境の中で、授業を組み立てていくというのは非常に難しい場面が何度もあった。しかし、その難しい点を弱点と捉えなくて、何か代わりにできることはないのかと悩みながら授業づくりを行い、児童の心を揺さぶる授業ができたのは、教師として大変魅力的であった。それができたのもマナウス日本人学校の同僚の協力や理解があったという点は非常に大きい。また、何と言っても日本の反対側に位置するマナウスに住む日系人やブラジル人とのつながりということが、私の授業づくりに欠かせない存在としていた。関わった関係者すべてに感謝したい。この実践だけでなく、マナウス日本人学校で学んだ多くの実践をここ山形の児童や教員にも伝え、グローバル人材育成の一助となることが私の使命である。